はじめに

地域の文化や暮らしの智恵を学ぶために、実際に地域にでかけ、地元の方々を先生として地域を教科書に五感のすべてを駆使して学ぶことをフィールド・ワーク（野外調査）と呼びます。

このブックレットは、日本国内でのフィールド・ワークをめざす人たちに、調査計画を立てて出発するまでにわきまえておいてほしいことをまとめたものです。

序章として、研究者の卵であった安渓遊地が晩年の宮本常一先生からいただいた励ましの言葉を置きます。この本が生まれた背景の説明にもなっているはずです。

山口県周防大島に生まれ、研究者としてこの人ほど多く日本の各地を歩いた人はないだろうといわれた希有のフィールド・ワーカーであった宮本常一先生が、調査される側の様々な迷惑について、たくさんの例をあげながら指摘された文章を第一章に置きました。地域の人々の仲間として胸襟を開いて語り合えた宮本常一先生ならではの語りです。

以後は、宮本先生の「調査地被害」というものの見方に触発されて、日本の南の島々でのフィールド・ワークでの経験を安渓遊地が語ります。第二章は、ある南の島では調査される側の様々な迷惑が今も続いていることが生々しく語られます。第三章は、沖縄の復帰とともに押しかけた人々に対する島びとの言葉集です。第四章は、西表島を例にとって、学問と地域への愛のバランスについて、大学でのフィールドワーク論の講

義を再現します。第五章は、話し手やその子孫の当事者主権行使の事例紹介です。第六章は、マスコミによる「やらせ」の被害経験の語りです。そして第七章は、日本民族学会（文化人類学会の前身）での会員アンケートの結果を安渓遊地が学会の研究倫理委員会の委員（第二次）のひとりとしてまとめたもので、「調査する側」「される側」という固定した対立関係を「ともに仲間となる」新しい地平へ向けて解き放つ道についての提案です。

このブックレット作成にあたっては、宮本先生のご長男の宮本千晴さんのご協力をたまわりました。みずのわ出版の柳原一徳さんには、企画・編集・著作権処理・印刷・校正・デザイン・製本の全過程で丁寧で迅速な力添えをいただきました。

二〇〇八年二月

安渓遊地

増補版発行にあたって

本書は、ハンディなフィールド・ワークの手引として二〇〇八年四月の初版第一刷刊行以来七刷を重ねるに至りました。文化人類学や民俗学の副読本としてだけでなく、理系の方にも、地域づくりや援助、医療・看護・福祉のケアの現場の方にも読んでいただいていることをありがたく感じています。今は誰もがする自動車の運転にフィールド・ワークを例えるなら、この本の初版は運転免許の更新の時に見せられるビデオのように、悲惨な事故を避け、事故を起こしても絶対にひき逃げはしない心構えをもつ運転者を育てることに徹した内容でした。

いつかは宮本常一先生のピキピキ（オートバイ）でのツーリングで始まるわくわくするアフリカ編も読んでいただきたいと願っておりましたが、新たに三つの章を付け加えた増補版を出せることになりました。第八章は、宮本先生が初めての外国旅行をプレゼントされて訪れた東アフリカ訪問記からの抜粋です。第九章と一〇章は、その三年後の一九七八年にケニアとコンゴ民主共和国を訪れて〝日系アフリカ人〟となった私と妻の貴子のアフリカ経験です。

今回も、みずのわ出版の柳原一徳さん、宮本千晴さんのお世話になりました。宮本先生の東アフリカでの写真は、伊藤幸司さん撮影です。ありがとうございます。

二〇二四年三月

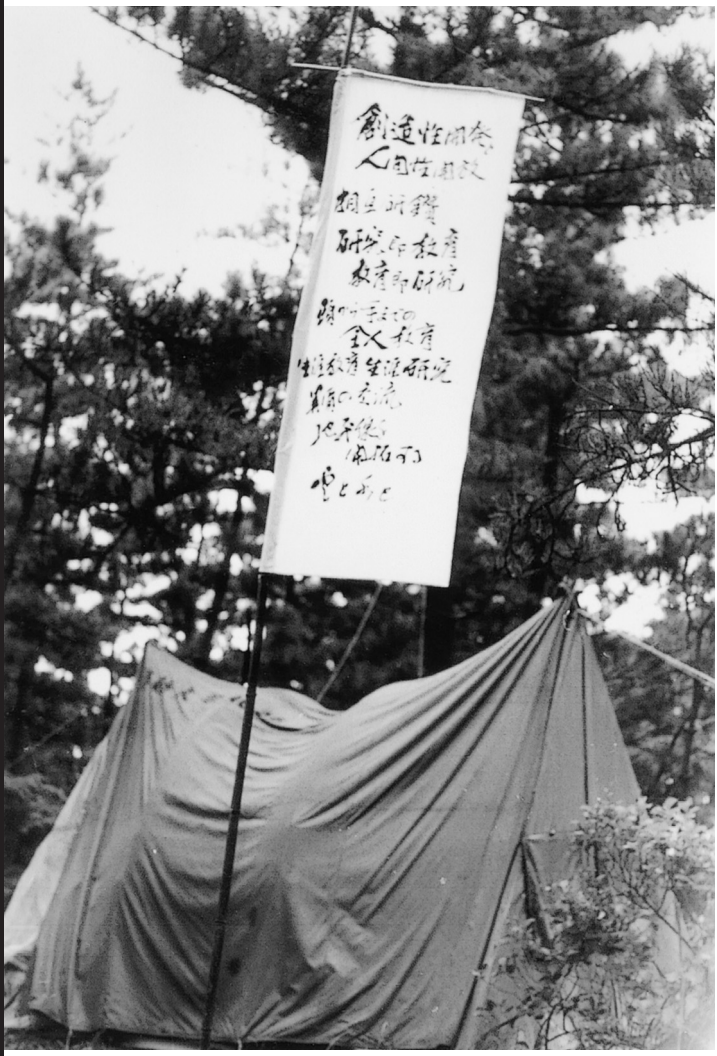
安渓遊地

目次

はじめに　1
増補版発行にあたって　3
序章　宮本常一先生にいただいた言葉（安渓）　5
第一章　調査地被害――される側のさまざまな迷惑（宮本）　13
第二章　される側の声――聞き書き・調査地被害（安渓）　35
第三章　「バカセなら毎年何十人もくるぞ」（安渓）　53
第四章　フィールドでの「濃いかかわり」とその落とし穴（安渓）　59
第五章　種子島にて・屋久島からの手紙（安渓）　89
第六章　まぼろしの物々交換を知夫里島に求めて（安渓）　95
第七章　「研究成果の還元」はどこまで可能か（安渓）　99
第八章　宮本常一・はじめてのアフリカ（宮本）　113
第九章　「いまここで」という暴虐からの解放（安渓）　119
第一〇章　「父たち」の待つ村への旅（安渓）　127
引用文献　144
初出一覧　148
索引（フィールドでの指針として）　150

序章　宮本常一先生にいただいた言葉

安渓遊地



地域を教科書に学ぶ――移動大学の八つの目標（新潟、1973年）

「あらゆるものをたべておいてください」

今西錦司門下の川喜田二郎先生の移動大学運動に出会って（佐田尾、二〇〇四）、私は、体で実地に学ぶフィールド・ワークという勉強の方法の魅力のとりこになった。そして、アフリカに憧れて京都大学の大学院に進んだ。今西さんのあとをついでアフリカでの人類学調査を指揮しておられた伊谷純一郎先生は、しかし、私にまず日本列島最南端の八重山・西表島行きを指示されたのだった。一番近い人家まで道なき道をたどって八時間は歩くという廃村調査が与えられた課題だった。

一九七四年六月、はじめて訪れた西表島で、廃村行きの準備をしたり、聞き取りをしたりしながら、私は、若者たちの集まる家に居候させてもらうことになった。泡盛を酌み交わしながらいろいろな話がでる。ある若者は、私と同い年だったが、何年もカツオ船に乗って世界を回ってから島に戻ってきたのだという。そして、明治三六年まで宮古・八重山の人々に移住を禁じて厳しい人頭税を課した被差別の歴史などを語ったあと、大声で「おまえは、どこの出身か？　まさか薩摩じゃあるまいな！」と詰問した。私の母方は、鹿児島県大島郡加計呂麻島（かけろまじま）の出であったが、「奄美ならまあよかろう」と許されたのであった。しだいにうちとけて話すうちに、島を「研究」に訪れる「バカセ」たちの行状について若者たちは語ってくれた。その内容は移動大学で読んだ、宮本常一先生の言葉を思い出させるものだった。「調査というものは地元のためにはならないで、かえって中央の力を少しずつ強めていく作用をしている場合が多く、しかも地元民の人のよさを利用して略奪するものが意外なほど多い。」（本書第一章）

実際に宮本先生にお会いする機会を得たのは、その年の八月、大山の香取で開かれた第一二回移動大学でのことだった。一〇八人もの参加者が寝泊まりするテント村と道を隔てた広々した空き地の端の、見晴らし

がきく場所に私は自分の小さなテントを張ることにした。テントを固定するペグを打ち終えて、ふと気がつくと、ごましお頭のがっしりした男の人がかたわらに立っている。手にはスコップがある。そして、やおらテントの周りに溝を掘り始めた。あっけにとられている私を尻目に幅三〇センチもある溝がどんどん掘られていく。スコップをふるいながら、こんな言葉が出た。「テントを張る時に一番大事なのは、水はけだよ。縄文人も君みたいに、こんな舌状台地の端を選んで住んだ。そして、斜面の下にゴミをどんどん投げ捨てた。だから、住居址とは離れた所に遺物が集積して出てくる。」スコップにもたれながら、この人は私がテントの中にリュックを入れ、テープレコーダやカメラを取り出すのを覗きこんで、こうつぶやいた。「もっと丁寧に入れんと、テントが歪むがな……。ああ、こんなに軽くてちいさい装備を見ていたら、また歩いてみようなってきたなあ。」

これらの言葉を聞いて、やっと私は、大山移動大学の案内パンフの中に「講師・宮本常一」と書かれていたことを思い出した。それでは、この人があの宮本先生だったのか。その名前は、私の中では先に引用した「調査地被害――される側のさまざまな迷惑」（本書第一章）という、その後の私のフィールド・ワークを決定した文章の著者として記憶されていた。それから四半世紀を経て、妻とともにまとめた本の冒頭に「される側の声――聞き書き・調査地被害」を置いたのも、宮本先生の影響ぬきには考えられない（安渓・安渓、二〇〇〇、本書第二章）。

移動大学のキャンパスはちょうど川喜田先生考案の発想法の個人作業のまっただなかだった。宮本先生がお得意の座談をくりひろげられる場が少ない時期にあたっていたのだろう。おかげで私は、宮本常一先生にテントの溝を掘っていただくという思いがけない光栄に浴したのだった。

夕日をあびた山麓をながめながら、修士研究として取り組み始めたばかりの西表島での廃村調査について

宮本先生に問いかけてみた。「文部省の資料館に明治中期の『八重山嶋巡検統計誌』という一連の書類があるんですが、第三十五冊などというのがあるのに、今では四冊しかのこっていません。私が調べている西表島の廃村・鹿川のものなどが見られるといいと思うんですが、どこかに残っていないものでしょうか。」即座にこんな答えが返ってきた。

「あれは、田代安定が当時の山縣有朋内閣に提出した報告書でしょう。そのうちの何冊かだけが『琉球共産村落之研究』を書いた田村浩さんから渋沢敬三先生の手に入って、先生の祭魚洞文庫に収められたのです。田村浩という人は、渋沢先生の友達で、沖縄へ赴任することになって『琉球へ島流しだ』としょげていたら、渋沢先生は『いや、他ではできない研究をするまたとない機会だ』とはげまされた。田代安定の報告の残りについては、あまり望みはもてないけれど、時間をかけて捜してみたらどうだろうか。」

問わず語りに宮本先生は、沖縄のかかえる課題についても聞かせてくださった。島を研究の対象にさせてもらう者は、その研究のテーマがなんであれ、島とその島びとたちの運命に無関心でいてはならないし、いられるはずはない、という先生のお考えがあってこういう話をしてくださったのかもしれない。「地域がよくなっていくためには、地元から良いアイディアが出なくてはいけない。沖縄なら例えばインドジャボクという木を薬用に栽培するとか、さまざまな可能性が埋もれているはずだ。自治省は、こういうプロジェクトに金を出すよ。経済企画庁だったら、金はあまり出ないが、逆に地元の言い分は半分以上通るだろう。」

廃村調査のあと、東南アジアに連なる西表島の古代的稲作と海上の道の研究をした私は、思わぬ商売に手を染めることになった。「本土なみ稲作」を目指して、西表島で農薬散布が始まったのを見かねて、私は、地元の人と諮って一九八八年から特別栽培米の制度を活用した産直の無農薬米「ヤマネコ印西表安心米」の企画・宣伝を担当したのである。ボランティアとはいえ、慣れない商売の道は、学問の道よりはるかに険し

く、闇米扱いしてくる役所や持ち逃げ常習の詐欺師との駆け引きなど、ひとつ間違えば一千万円単位の赤字を出しかねない真剣勝負の連続であった。

そのころ私が聞いた「される側の声」の中では、宮本先生の「地域がよくなるのは地元からのアイデアで」に連なる思想が、次のように表現されている。「あなたも、最近、どこかの島で『無農薬米の産直で地域おこし』とか言って旗ふってるらしいけど、島の人間が独力でできるように育てていかなくちゃだめでしょ。今みたいな、船をひっぱって岩ゴロゴロの山道を通すようなやり方が長続きすると思うのは、あなたの思い上がりじゃないかしら。無理に無理を重ねて家族を泣かすような学問が何になるの。よぉく考えてね。よそから持ってきた智恵や文化で、地域が本当に生き延びられるわけがないのだということを。」（本書第二章）

今、私の手元には宮本常一先生からの二通の葉書が残っている。どちらも、武蔵野美術大学に先生が作られた資料室の展示を絵はがきにしたものだ。ひとつは、一九七六年九月一日の消印があり、図柄は糸車だ。

暑中見まい多謝。私もこの夏沖縄へかけ足でいって来ました。ほんの二、三日の旅でしたが、宮古、伊良部、石垣、竹富、西表を訪れました。モクマオウとギンネムの木のはびこっているのにおどろきました。内地のセイタカアワダチソウよりひどい。ギンネムをなんとかしないとどうしようもなくなるのではないかと思いました。朝のうち石垣島を一周して、その午后の飛行機で石垣を経て、ナハから東京へかえり飛行機を利用すると沖縄が本土へあまりにも近くなっているのに驚きました。

そして、先生が亡くなられる半年ほど前にはこんな葉書をいただいている。一九八〇年八月二五日の消印で、しょいこの下にあてる「ばんどり」コレクションの絵葉書だ。

まえに西表のすぐれたレポート[1]を送っていただいて拝読して、すごく感激して手紙を出そうと思ったら、アフリカへいっていることに気がついてそのうちかえって来るのだからと思っていたらもうちゃんとかえっていることを暑中見まいで知り、さて私の方は例のごとくうろうろしていて何もかも事がはかどらずこの夏もおわりが近付いています。何も彼も後から後から気のつくことばかり、貴兄の場合は今のうちにウンと貪欲にあらゆるものをたべておいてください。

宮本先生が御存命であったら、現在私たち日本人が向きあっている環境問題等の状況をどう見極めただろうか。全国各地の離島地域で進められている公共事業等の大型施設整備にともなって周辺海域が受ける生物の多様性やその生態系への影響はどうであろうか。宮本先生のふるさとの周防大島の近隣にも大規模なプロジェクト[2]がひかえている。足下の身近な自然環境についてはどうか。山も畑も田んぼも人の手が入っていない荒れ地が目立ってきた。経営が成り立たず島の生業が失われゆくこの状況に対してどのような意見を述べられたであろうか。

最近よくそんなことを考える。例えば、宮本先生のふるさとの近くの周防灘の長島の海は、日本の浅い海としては最高の自然の豊かさをもつ場所であることが明らかになっている（安渓編、二〇〇一）。

地元主導の自然との共存こそが自然保護であると考える私は、現地生物調査や自然保護を考えてもらうためのシンポジウムの企画などに協力している。長島で開いたそんな会のいくつかに、宮本常一先生の奥様のアサ子さんがご近所の方々と参加してくださったのも、望外の喜びであった。

最近は、妻とともに屋久島にも行かせてもらっている。全国から集まる大学生と地元の高校生を対象に、今西さんの流れを汲む屋久島研究者たちと地元の自治体が協力して夏に実施する一週間あまりの「屋久島フ

ィールドワーク講座」の講師として招かれるのだ。私たちが担当する「人と自然班」のもっとも重要なテーマは、宮本先生が指摘された「される側の迷惑」をめぐる「イバルナ学者」であり、もうひとつはバイオリージョナリズム（流域の思想）と現代に生きるアニミズムを中心とした「イバルナ人間」である。さらに二〇〇一年には、トヨタ財団等の助成金を得て、アフリカと屋久島の交流も実現した。宮本先生も旅されたケニアと内戦のさ中のコンゴ民主共和国で地元の森を守ろうと文字通り懸命に努力している四人の仲間たちを「フィールドワーク講座」の時期に合わせて招き、地元のエコツアーガイドや森林保護活動家たちとの交流もできた。ともに学ぶ内容に、島という地域から地球の未来を構想する「イバルナ日本人」が加わったのである。

アフリカやフランスでの暮らしを経て、わが家は山口市の山村に移り住んだ。西表島にならった無農薬米が作れるようになって十余年。自分の興味の広がりや、やるべきことが自分の能力を越えるのではないかと感じて途方にくれることもしばしばであるが、そんな時、私は、宮本常一先生の言葉を思い起こしてみる。「ウンと貪欲にあらゆるものをたべて」「（地元の人達に）仲間だと思われればいいんじゃよ。」そのたびに、宮本先生の語り口とあのくしゃくしゃの笑顔がよみがえり、新しい力が湧いてくるのを感じるのである。

［註］

（1）「西表島の稲作：自然・ヒト・イネ」（安渓、一九七八）のこと。晩年の宮本先生は、生物や自然と人間生活の係わりに強い関心をもっておられたので、人と自然をまんべんなく見てやろうという私の西表研究の意欲をかってくださったのかもしれない。

（2）宮本先生のふるさとの瀬戸内海周防大島周辺では、住民の大きな論争を引き起こしつつ、二つの巨大プロジェクトが進められた。ひとつは、日本の浅海として最高の生物多様性をもつ上関町長島の上関原子力発電所建設計画。もうひとつは、岩国基地の沖合移設と称する米軍基地機能の拡張である。岩国では原子力空母が接岸できる岸壁が整備され、いま山口県とその近隣の住民および運命共同体としてのすべての生物たちは、南海トラフ地震が迫る中で、瀬戸内海にいくつもの原子力発電所が並び、さらに使用済みの核燃料の〝中間貯蔵施設〟が建設されるという状況への重大な岐路に立っている（詳しくは、安渓、二〇〇六 a および、https://ankei.jp で「上関」「岩国」「バイオリージョナリズム」などをキーワードに掲載記事を検索）。

第一章　調査地被害——される側のさまざまな迷惑

宮本常一

宮本常一（左端）の指導による民具収集（提供＝山口県旧久賀町、1972年）